共創福祉

2026年 第21巻 第1号

【実践報告】

髙橋　侑希

子どもと共に創り上げるミュージカル実践を通した保育者養成の試み

―学生の観察記録と振り返りから― …… 1

富山福祉短期大学

子どもと共に創り上げるミュージカル実践を通した保育者養成の試み ―学生の観察記録と振り返りから―

髙橋　侑希
富山福祉短期大学幼児教育学科

（2026.7.28受稿, 2026.8.5受理）

要旨

本報告は，学生と系列園の年長児が共にミュージカルを創り上げる実践を通して，学生が子どもの姿をどのように捉え，保育者としての援助や環境構成に関する考えをどのように深めたのかを明らかにすることを目的とした。対象はＡ短期大学幼児教育学科音楽ゼミ所属学生13名であり，年長児との活動における観察記録および実践後の振り返りの記述をもとに，学生が子どもの姿をどのように捉え，援助や環境構成についてどのように考えたのかを整理した。その結果，学生は歌唱や身体表現だけでなく，自信や楽しさ，他者との関わりなど，子どもの変化を多面的に捉えていることが判明した。また，その変化の背景を，活動の積み重ねや，友だちや学生との関わり，衣装を含む活動環境との関連から読み取り，子どもの姿に応じた援助や環境づくりの必要性について気付いていた。さらに，継続的な観察と振り返りを行いながら子どもと共に活動を創り上げた経験を通して，学生は一人ひとりの子どもの姿や表現が変化していく過程を捉え，子どもの姿に応じた援助や環境構成について考えを深めていた。以上のことから，本実践は，学生が子どもと共に活動を創り上げる過程で，継続的に子どもの姿や表現の変化を見取り，その経験を振り返ることが，一人ひとりの子どもの姿に応じた援助や環境構成について具体的に考える機会となることを示唆した。

キーワード：ミュージカル，保育者養成，保育実践，保育内容「表現」，養成校と系列園の連携

１．はじめに

『幼稚園教育要領解説』では，「教師は，主体的な活動を通して幼児一人一人が着実な発達を遂げていくために，幼児の活動の場面に応じて様々な役割を果たさなければならない。」[文献1)]と示されており，保育者には，幼児の主体的な活動を支えるために，幼児一人ひとりの姿を理解しながら，多様な役割を果たすことが求められている。

このような保育者としての専門性を育成するためには，保育者養成段階において，学生が実際に子どもたちと関わりながら学ぶ実践的な学修の機会が重要である。「保育園児が参加する授業では，日ごろ関わることの少ない子どもたちと，実際に触れ合う貴重な機会となるだけでなく，その後の学習において，子どもの姿が具体的にイメージできるようになり，学ぶ意欲の向上につながることが期待される。」[文献2)]実際に，園の行事に参加した学生の振り返りからは，年齢による子どもの姿の違いや異年齢児同士の関わりへの気づきがみられ，子どもの発達理解を深める機会となったことが報告されている。[文献2)]また，保育現場と連携した表現活動を取り入れ，学生への教育的効果について検討した報告では，学生が子どもの反応を見ながら自らの行動を考え，臨機応変に対応しようとする姿が報告されている[文献3)]。これらの報告から，学生が実際に子どもと関わる経験は，子どもの姿を具体的に捉え，保育者としての実践的な学びを深める機会となることが示唆されている。

Ａ短期大学幼児教育学科では，２年次開講科目「保育内容（総合表現）Ⅰ」および「保育内容（総合表現）Ⅱ」において，歌唱や演技，舞台づくりを通して総合的な表現力や協調性，コミュニケーション力を養うことを目的として，学生によるミュージカル実践を継続して実施している。

２．目的

2025年度には，これまで学生のみで創り上げていたミュージカルに，Ａ短期大学を運営する学校法人と理事長を同じくする社会福祉法人が運営する認定こども園（以下，「系列園」とする）の年長児が参加し，学生と子どもが関わりながらミュージカルを創り上げる実践を行った。この実践では，学生が子どもと共にミュージカルを創り上げる活動を通して，子どもの姿を観察し，子ど

もの姿やその変化を具体的に捉えるとともに，保育者としての実践的な学びを得ることを期待した。

そこで本報告では，ミュージカル実践における学生の観察記録および振り返りの記述をもとに，学生が子どもの姿をどのように捉え，保育者としての援助や環境構成に関する考えをどのように深めたのかを明らかにすることを目的とする。

3．実践・活動内容

3.1　実践の概要

本実践は，A短期大学幼児教育学科2年次開講科目「保育内容（総合表現）Ⅰ」および「保育内容（総合表現）Ⅱ」の授業の一環として実施した。実践には幼児教育学科2年生31名が参加した。また，系列園の年長児21名がハチ役としてミュージカルの一場面に参加した。

教材には『コンコーネ50番から生まれた室内ミュージカル　白雪姫』（ドレミ楽譜出版社）を用いた。学生は配役ごとに歌唱や演技の練習を行うとともに，演出・衣装・大道具・小道具の各係に分かれて制作にも取り組みながらミュージカル公演に向けた準備を進めた。また，年長児と共に舞台を創り上げることを前提として，子どもの発達や一人ひとりの姿を踏まえながら演出や衣装，音楽について検討を重ねた。

年長児は，物語の途中の森の動物たちの場面にハチ役として参加し，動物役の学生とともに「さんぽ」を歌唱した。また，役に合わせた身体表現を行った。出番以外の時間は客席でミュージカルを鑑賞し，出番になると客席から舞台上へ移動，出番終了後は再び客席へと戻って鑑賞を続けるという構成にした。ハチ役の衣装は学生が制作し，系列園の保育者から助言を受けながら準備を進めた。

ミュージカルの公演は2026年1月31日に2公演実施した。年長児の参加は希望制とし，系列園において本人および保護者の意向を確認した。年長児は希望に応じて1公演または2公演に出演し，21名のうち，13時の回には19名，15時の回には14名が参加した。

3.2　年長児との活動および観察記録

本実践報告では，A短期大学幼児教育学科2年生31名のうち，「保育実践演習」および「音楽表現演習」を履修する音楽ゼミ所属学生13名が記録した観察記録および振り返りの記述を用いた。

音楽ゼミ生は，系列園において年長児との活動を計3回実施した。活動日は2025年10月15日，12月15日，2026年1月21日であり，いずれも園の音楽活動の時間内に実施した。なお，12月および1月の活動には，ミュージカル公演において舞台上で年長児と共演する動物役の学生7名も参加した。

活動では，音楽ゼミ生が年長児の活動の様子を観察するとともに，活動の進行に応じて説明や援助を行い，必要に応じて歌唱や身体表現にも参加しながら子どもと関わった。学生は，子どもと共に活動に参加する立場と，子どもの姿を観察ならびに記録する立場の双方から実践に取り組んだ。観察にはチェックシートを用いて自由記述による記録を行った。チェックシートは各活動終了後に記入した。また，ミュージカルの本番終了後には，①子どもの変化の気づき，②成長を支えた要因，③今後の援助・関わりの工夫，④自分の学び，の4項目について自由記述による振り返りを行った。

4．倫理的配慮

本実践は富山福祉短期大学研究倫理委員会の承認（承認番号：2025 - 007）を得て実施した。

系列園の園長および担任保育者に対しては，実践内容について説明し，協力の承諾を得た。その後，保護者に対して，実践の目的および内容，観察記録の研究利用について文書により説明を行い，同意を得た。また，音楽ゼミ所属の学生に対しては，観察記録および振り返りの記述を研究資料として使用することについて，口頭ならびに文書で説明し，研究への参加について同意を得た上で実施した。本報告の作成にあたっては，園児および学生の個人情報の保護に十分配慮し，個人が特定されないよう記述した。

5．実践・活動評価

5.1　学生が捉えた子どもの姿と変化

観察記録および振り返りの記述からは，学生は子どもの姿や変化として，歌唱や身体表現の変化，自信や楽しさの高まり，友だちや学生との関わりの深まりなどを捉えていたことが読み取れた。

学生の記述には，「イメージしながら歌うことができるようになった」「主体的にハチを表現する姿が見られた」「自分らしいハチの表現ができるようになった」など，表現に関する変化を捉えた記述が多く見られた。また，「第1回目はただ歌っているだけで，イメージしたり，抑揚がなかったけど，本番に近づくにつれ，良い感じに歌うことができていた」「歌詞をイメージしながら歌えるようになっていった」といった記述も見ら

れた。活動のはじめは歌詞や動きを十分に理解できていない様子も見られたが，活動を重ねるにつれて歌詞の内容や役のイメージを捉えながら歌唱や身体表現を行う姿が見られるようになったと学生は捉えていた。また，「３回目になるとイメージがふくらみ，主体的にハチを表現する姿が見られた」「数を重ねるごとに自分らしいハチの表現ができるようになっていった」といった記述からは，子どもたちが単に歌や動きを覚えるだけでなく，役になりきりながら自分なりの表現を楽しむ姿を学生が見取っていたことがうかがえた。

学生は子どもたちの気持ちの変化にも着目していた。「自信をもって楽しく歌っていた」「笑顔で歌っていた」「音にのり，ノリノリで歌っていた」といった記述が見られた。初回の活動では子どもたちに緊張した様子が見られたが，活動を重ねるにつれて表情や歌声に変化が見られ，自信や楽しさを感じながら活動に参加する姿が見られたと捉えていた。

さらに，「自ら学生と関わりに行く姿が見られた」「自分から考えて積極的に動いていた」「集中力が毎回伸びているように感じた」「友だちや学生と調和するようになった」などの記述も見られた。これらの記述からは，子どもたちが受動的に活動に参加するだけでなく，活動を重ねる中で主体的に関わる姿や，友だちや学生との関係を意識しながら活動する姿を学生が見取っていたことがうかがえた。

これらのことから，学生は歌唱や身体表現の変化だけでなく，子どもの気持ちの変化や友だちや学生との関わりにも着目しながら子どもの姿を捉えていた。

５.２　学生が考えた子どもたちの成長を支えた要因

学生の振り返りの記述からは，学生が子どもの成長を支えたと考えた要因として，繰り返しの活動や経験，友だちや学生，保育者との関わり，衣装やミュージカルならではの活動環境が挙げられていた。

「繰り返し練習することで，子どもたち一人ひとりが自信をもって歌う姿が見られた」「練習の段階で衣装を着て本番のように動いてみたことで子どもたちの意識が高まった」といった記述からは，活動を重ねることや本番を意識した経験が，子どもたちの意欲や自信の高まりにつながると捉えていたことが読み取れた。

また，「友だちとの関わり」「学生と一緒に歌うことで，より自信をもって歌うことができていた」「２回目，３回目，本番とで動物役と関わることで緊張もほぐれたりした」など，人との関わりに関する記述も見られた。学生は，子どもたちにとって友だちや学生との関わりが安心感につながり，それが活動への参加や表現につながったと受け止めていた。

衣装や役への期待感についての記述も見られ，「衣装のワクワク」「ハチの衣装を作り終え，着させてあげたことが成長要因」「ミュージカルへの楽しみ」といったものもあった。これらから，学生は，子どもたちが役になりきることのできる衣装や本番への期待感が，子どもたちの活動への参加や役になりきった表現を支える要因になっていたと考えていた。

以上のことから，学生は子どもたちの成長を，活動の積み重ねや周囲の人々との関わり，ミュージカルならではの活動環境との関係の中で捉えていたことが読み取れる。

５.３　学生が考えた今後の援助・関わりの工夫

学生の振り返りの記述からは，今後の援助や関わりの工夫として，子どもたちが安心して活動に参加できる環境づくり，一人ひとりの気持ちや表現を受け止めること，子どもの主体性を引き出す働きかけ，活動を楽しめる工夫などが挙げられていた。具体的には，「子ども一人ひとりの気持ちを受けとめ，子どもたちが安心して活動に参加できるような雰囲気を作る」「緊張させない関わり方や発表に向けて前向きになれる援助が必要だと思った」「最初は子どもたちが緊張したり，怖がるかもしれないので，最初に第１回目でやったようなオリエンテーションのようなかかわりが必要だと思う」といった記述が見られた。これらの記述からは，学生が子どもたちの安心感を高めることや活動への参加を支えるためには，環境づくりや関わり方が重要であると考えていたことが読み取れた。

また，「子どもたちが自由に表現を楽しめるよう，小さな動きやつぶやきを拾ったり認めたり取り入れたりするよう心掛けたい」「自信をもって歌えない子どもには無理して歌わせようとせず，気持ちに寄り添いながら関わる」「何にでも挑戦できる環境づくり・個々の表現を大切にする」といった記述も見られた。これらから，学生は，子ども一人ひとりの想いや表現を受け止めることの重要性を捉えていた。

さらに，「『どうしたらもっと良くなる？』と問

いかける声かけをして，子どもたち自身で考えながら活動をしていけるようにする」「歌詞を子どもたちなりに想像できるような声かけや活動を行う」「まずは自分が楽しむこと」といった記述も見られた。学生は保育者の働きかけや活動の工夫によって，子どもたちの主体性や表現を引き出すことの重要性を捉えていた。

これらのように，学生は，子ども一人ひとりの姿や表現を受け止めながら，安心して活動できる環境を整え，子どもの主体性や表現を引き出す援助や関わりが重要であると考えていた。

5.4　学生の学び

学生の振り返りの記述から，本実践を通して，子どもの姿や変化への気づき，保育者としての援助や関わりのあり方についての学び，さらに学生自身の成長につながる気づきが見られた。

子どもの姿やその変化に関しては，「子どもたちは，思っている以上に賢くて記憶力や実践力が高いことが分かったため，どこまで求めていいのかを知ることができた」「一人ひとり反応が違うため，子どもの姿に合わせた関わりが大切だと学んだ」「子どもは1回言われたことをしっかり自分なりに覚えて動く」「子どもたちは活動を通していくことで多くのことが身に付いていくのだと感じたため，1つ1つの活動を大切にしていきたい」といった記述が見られた。これらの記述からは，学生が一人ひとりの子どもの姿やその変化を具体的に捉えていたことが読み取れた。

また，「子どもの小さな変化に気付き，安心感を持てるような雰囲気を作る」「子どもが少しでもできるようになったことを見つけ褒める」「子どもが楽しみながら歌うことができるように工夫しながらしていく必要がある」「上手，下手で判断ではなく，その子の表現をしているという事を大切にし，そのための環境づくりを大切にするべきと思った」「子どもの成長を見守る。できるようになるように，援助する」といった記述も見られた。学生は子どもの姿を丁寧に捉え，それに応じた援助や環境づくりの重要性について学んでいたことがうかがえた。

さらに，「衣装係として，どうしたらもっと良くなるのか自分から聞いて行動したり，共有すること」「子どもと関わる中で，自分の中で関わる力やコミュニケーション能力が向上したと思う」「各先生方の子どもへの声かけや伝え方で子どもの表現をもっと引き出すことができる」といった記述も見られた。これらから，学生は子どもの姿やその変化を具体的に捉えるとともに，自らの保育実践や保育者としてのあり方についても学びを深めていたことが読み取れた。

以上のことから，学生はミュージカル実践を通して子どもの姿や表現の変化を継続的に見取り，子ども一人ひとりの姿に応じた援助や関わりについて考え，保育者としての実践的な学びを得ていたことが示された。

5.5　考察

本実践において，学生は歌唱や身体表現の変化だけでなく，子どもの気持ちの変化や友だち，学生との関わりにも着目しながら，子どもの姿を捉えていた。これは，子どもと共にミュージカルを創り上げる過程に継続的に関わり，複数回にわたって同じ子どもたちの姿を観察したことにより，活動を重ねる中での子どもの姿や表現の変化を捉えることにつながったものと考えられる。長谷川・平原[文献2)]は，学生が実際の園の行事に参加し，子どもと触れ合うことが，子どもの発達理解を深める機会となったことを報告している。本実践においても，学生が継続して同じ子どもたちと活動を共にしながら観察したことで，活動を重ねていく中で変化していく子どもの姿を具体的に捉えていたと考えられる。

また，学生は，子どもの変化を活動の積み重ねや友だち，学生との関わり，衣装などの活動環境との関係から捉え，子ども一人ひとりの姿や表現を受け止めながら，安心して活動できる環境を整えることや，主体性や表現を引き出す援助や関わりが重要であると考えていた。『幼稚園教育要領解説』では，「幼児の遊びが深まっていかなかったり，課題を抱えたりしているときには，教師は適切な援助を行う必要がある。」と示されており，さらに「一人一人の発達に応じた援助のタイミングや援助の仕方を考えることが，自立心を養い，ひいては幼児の生きる力を育てていくことになる。」（文部科学省，2018，p. 117）[文献1)]としている。学生の振り返りには，一人ひとりの気持ちや表現を受け止めることや，子どもの姿に応じた声かけや環境づくりについての記述が見られた。これらのことから，実際の子どもの姿を捉えながら活動を振り返る経験は，その姿に応じた援助や環境構成について具体的に考える機会となったと考えられる。

本実践の特徴は，系列園との継続的な連携のもと，学生が子どもを単に観察する立場ではなく，子どもと共に一つのミュージカルを創り上げる活

動に参加しながら学んだ点にある。実践では，子どもの参加を前提として演出や衣装，音楽などについて検討を重ね，学生は子ども一人ひとりの姿や活動への参加の仕方を意識しながら準備を進めた。また，系列園の保育者から演出や衣装制作について助言を受けながら準備を進めたり，子どもへの声かけや援助の様子を実際に観察したりすることができた。学生だけで作品を完成させることを目的とするのではなく，子どもと共に一つの舞台を創り上げることを前提として活動したことにより，目の前の子どもに応じた援助や環境構成について具体的に考える機会となったといえる。

６．今後の課題

本報告は音楽ゼミ所属学生13名の観察記録および振り返りの記述をもとに実践を振り返ったものであり，学生全体の学びを示すものではない。また，学生による記述をもとに考察を行ったため，保育者や子どもの視点を含めた検討には至っていない。今後は，学生だけでなく保育者や子どもの視点も取り入れながら，ミュージカル実践を通して学生が子どもの姿をどのように捉え，その姿に応じた援助や環境構成をどのように考えるようになるのかについて，さらに検討していきたい。

７．謝辞

本実践にあたり，協力いただいたＡ短期大学幼児教育学科の学生の皆様，系列園の園長先生をはじめ教職員の皆様，年長児および保護者の皆様に心より感謝申し上げます。また，本実践に際し，ご助言とご支援を賜りました関係者の皆様に深く御礼申し上げます。さらに，英文要旨の作成にあたり，ご助言ならびにご校閲を賜りました山梨大学名誉教授ジェラルド・グローマー先生に心より感謝申し上げます。

引用文献

１）文部科学省．幼稚園教育要領解説．フレーベル館．2018．
２）長谷川香，平原由衣．保育者養成校と保育現場の連携の試み　―人と関わる力の育ちに着目して―．豊岡短期大学論集，16，189-198．2019
３）村田健治，村上優．保育者と保育者養成校との協働保育実践が及ぼす学生への教育的効果．奈良佐保短期大学研究紀要，32，1-19．2024．

Preschool Teacher Education through Musical Theater Practice Co-created with Children —An Analysis of Students' Observation Records and Reflective Writings—

Yuki TAKAHASHI

Department of Early Childhood Education, Toyama College of Welfare Science

Abstract:

The purpose of this study was to examine how participation in a musical theater project collaboratively created by junior-college students and senior kindergarten children from an affiliated kindergarten influenced university students' understanding of children and their perspectives on educational support and learning environments.

The participants were thirteen students belonging to the music seminar in the Department of Early Childhood Education at a junior college. Qualitative data were collected from observation records written during activities with the children and reflective writings, completed after the project, were analyzed descriptively.

The findings revealed that the students recognized children's development from multiple perspectives, including changes in singing, physical expression, confidence, enjoyment, and interaction with peers and university students. The students also interpreted these changes in relation to repeated participation in the activities, interaction with others, and the learning environment, including the use of costumes. Through continuous observation and reflection while collaboratively creating a musical theater performance with the children, the students developed a deeper understanding of children's developmental processes and of the appropriate educational support and learning environment arrangements that respond to individual children's needs.

These findings suggest that engaging university students in collaborative creative activities with young children, together with continuous observation and reflective practice, provides valuable opportunities for prospective preschool teachers to consider individualized educational support and learning environment arrangements based on children's development.

Keywords: musical theater, preschool teacher education, childcare practice, expressive activities, collaboration between a teacher education institution and an affiliated kindergarten

『共創福祉』投稿規定

1．投稿の資格は富山福祉短期大学の教職員に限る。ただし、編集委員会が必要と認めた場合にはこの限りではない。共著の場合、第１著者は原則として投稿資格を持つ者とする。

2．投稿される論文は未発表のものに限る。ただし、学会において一部発表（投稿）した内容を含むか、学会で発表された複数の論文をまとめたものなどはその限りではない。

3．論文種別は総説、原著論文、研究報告、実践報告であり、以下のように定義される。

- 総　　説：研究や教育についての動向や解説、また評論などについてまとめたもの。
- 原著論文：一研究としてまとまって終結しており、結論や新たな知見が示されている論文である。また論文内容の一部が学会等で発表（投稿）されていることが望ましい。
- 研究報告：一研究の過程での部分的なまとまりで、実施方法、評価方法などの提案、また部分的な結果を示す論文である。
- 実践報告：教育方法の改善や、研究を進める上での改善などに関する報告、また短期的な研究・教育の調査に関する報告などにあたる。

4．査読は原則として編集委員会が指名した２名の査読者によりなされる。

5．投稿原稿の採否決定および修正は査読の結果をもとに、編集委員会による審査を経て判断する。

6．本誌に掲載された論文の著作権は富山福祉短期大学に帰属する。

7．本規程の改正は編集委員会の議を経て、編集委員長の決定により行なわれる。

附則　この規程は平成27年４月１日から施行される。

『共創福祉』執筆要項

1．原稿はWord、Excel、PowerPointソフトにより作成し、紙媒体と電子媒体を作成する。紙媒体はA4用紙に１行40字・40行とする。論文投稿時は紙媒体のみ、最終原稿提出時は紙媒体と電子媒体を提出する。表・図の挿入位置は、本文の右側の欄外に記入する。

2．原稿の長さは原則として、本文・表・図を含めて20頁以内、刷り上がり時12頁以内とする。

3．原著論文は原則として、はじめに（序または研究の背景など）、研究目的、研究方法、結果、考察、結論、謝辞、引用文献の順に構成する。

4．原稿は以下の順に書くものとする。

［第１頁］標題、所属名、著者名、和文要旨（500字程度）、和文キーワード（８語以内）。

［第２頁］英文で、標題、著者名、所属名、Abstract（450ワード程度）、Keywords（８語以内）。

［第３頁以降］

- 本文：章、節の番号は、第１章に当るものは、“１”、第１章第１節に当るものは、“１．１”というように着ける。また、式番号は、章ごとに（２．１），（２．２）のようにして、式の左側に統一する。
- 表：一枚の用紙に一つの表を書く。表の番号は論文中に現れる順に従って、表１、表２、…または、Table １，Table ２のように書く。
- 図：図の番号は論文中に現れる順に従って、図１、図２、…または、Fig. １、Fig. ２、…のように書く。

5．引用文献の書き方は、本文中で引用する順に、１）、２）というように項番を付ける。

- 論文、研究報告等の場合
  著書名、表題、雑誌名（学会名）、巻、号、ページ（始―終）、発行年（発表年）
- 雑誌の場合
  著書名、表題、雑誌名、巻、号、ページ（始―終）、発行年
- 単行本などの場合
  著書名、書名、出版名、
- 出版年編集書の中の一部の場合
  著者名、標題、編集書名（編集者名）、巻、ページ（始―終）、発行所名、発行年

6．本文中での引用文献の引用は、文献１）、文献２）のように記述する。

7．著者校正は原則として一回とする。その際、原著論文は、印刷上の誤り以外の字句や図版の訂正、挿入、削除等は原則として行わない。

投稿論文チェックリスト

＊投稿する前に原稿を点検確認し，原稿を添付して提出して下さい.
　下記項目に従っていない場合は，投稿を受理しないことがあります.

□	1．	原稿の内容はほかの出版物にすでに発表、あるいは投稿されていない。
□	2．	筆頭著者は富山福祉短期大学教職員である。
□	3．	倫理的配慮を要する研究はその内容が記載されている。
□	4．	英文要約は添削を受けている。　チェック・機関名
□	5．	論文コピーは３件必要であり、２件には筆者名のないものとする。
□	6．	原稿はWord、Excel、PowerPointソフトにより作成し、紙媒体と電子媒体を作成する。紙媒体はＡ４用紙に１行40字・40行である。表・図の挿入位置は、本文の右側の欄外に記入している。
□	7．	原稿の長さは原則として、本文･表･図を含めて20頁以内、刷り上がり時12頁以内である。
□	8．	論文は、はじめに(序または研究の背景など)、研究目的、研究方法、結果、考察、結論、謝辞、引用文献の順に構成している。
□	9．	原稿は以下の順に構成している。 [第１頁]標題、所属名、著者名、和文要旨(500字以内)、和文キーワード(８語以内)。 [第２頁]英文で、標題、著者名、所属名、Abstract(450ワード程度)、Keywords(８語以内)。 [第３頁以降] 本文の章、節の番号は、第１章に当るものは、“１．”第１章第１節に当るものは、“１.１”というように付ける。また、式番号は、章ごとに(２.１),(２.２)のようにして、式の左側に統一する。
□	10.	表は一枚の用紙に一つの表を書く。表の番号は論文中に現れる順に従って、表１、表２、…または、Table １、Table ２のように書いている。 また、図は論文中に現れる順に従って、図１、図２、…または、Fig. １、Fig. ２、…のように書いている。
□	11.	引用文献の書き方は、本文中で引用する順に、１)、２)というように項番を付け以下のように記述している。 ・論文、研究報告等の場合 　著書名、表題、雑誌名(学会名)、巻、号、ページ(始―終)、発行年(発表年) ・雑誌の場合 　著書名、表題、雑誌名、巻、号、ページ(始―終)、発行年 ・単行本などの場合 　著書名、書名、出版名、 ・出版年編集書の中の一部の場合 　著者名、標題、編集書名(編集者名)、巻、ページ(始―終)、発行所名、発行年
□	12.	本文中での引用文献の引用は、文献１)、文献２)のように記述している。

編集委員会

編集委員長　　小倉　之子

編 集 委 員　　松尾　祐子，　横道　博子，　炭谷　英信

清水　美里，　堺　　信貴

共創福祉2026年　第21巻　第１号
Synergetic Walfare Science

2026年（令和８年）11月１日発行

編集・発行　　富山福祉短期大学
〒939-0341　富山県射水市三ヶ579

印　　刷　　㈱タニグチ印刷

Synergetic Welfare Science
Vol.21, No.1, 2026

Contents

Practice Report

Preschool Teacher Education through Musical Theater Practice Co-created with Children

—An Analysis of Students' Observation Records and Reflective Writings－

……*Yuki TAKAHASHI* 1

Toyama College of Welfare Science